



Data

監督・脚本: パオ・チョニン・ドルジ

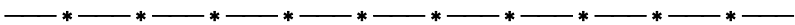
出演: シェラップ・ドルジ/ウゲン・ノルブ・ヘンドゥップ/ケルドン・ハモ・グルン/ベム・ザム

👁️👁️ みどころ

「学校モノ」は中国映画がよく似合う。『あの子を探して（一個都不能少）』（99年）がその典型だが、中国は今、米国と覇権を争うまでに。すると今、「山の教室」が世界で一番似合う国は、ブータン？

“国民総幸福の国”とは言え、首都に住む今ドキの若い教師にとって、標高4800m、人口56名のルナナ村への赴任は地獄。山道を歩いていだけで1週間以上かかるそうだから、そんなバカな！？

着いた途端の「僕にはムリです」発言は失笑モノだが、その後の展開は？アルプスの山に響く“ドレミの歌”は素晴らしかったが、本作に見る美しい風景も、スクリーン上で再三歌われる“ヤクに捧げる歌”も素晴らしい。コロナ禍、久しぶりに心洗われる良い時間を！



■□■ “幸せの国”はどこに？ “山の教室”はどこに？ ■□■

面積は九州とほぼ同じ、人口約72万人の国ブータンは、中国、ネパール、ミャンマー等に囲まれた地にある。国際空港のあるパロの町や、首都ティンプーは標高2300メートル前後だが、主人公のウゲン（シェラップ・ドルジ）が教師として赴任することになったブータン1の僻地、ルナナはなんと標高4800メートルというからすごい。ルナナは「闇の谷」、「暗黒の谷」を意味しているそうだから、オーストラリアに行って歌手になる計画を進めている、夜遊びが大好きな今ドキの若者ウゲンにとって、そんな任務はまっぴらごめん。

学校を卒業後すぐに就いた今の教師の仕事は5年間やらなければならないそうだから、残りは1年。それすら嫌で早く辞めたいのに、今、国（？）からは否応なくルナナにある“山の教室”への赴任が命じられることに。日本では東京一大阪間は新幹線で2時間半、

北海道や九州へも飛行機で1～2時間だが、首都ティンパーからルナナまではなんと険しい山道を1週間以上歩かなければならないようだ。そりゃ大変だが、とりあえず冬が来るまでの間はルナナに行き、そこで過ごさなければ！

■□■ 1週間以上の赴任の旅 vs 『山の郵便配達』 ■□■

日本人が1番好きな中国映画は、『初恋のきた道 (我的父親母親)』(00年)、『シネマ5』194頁)と『山の郵便配達 (那山、那人、那狗)』(99年)、『山の郵便配達』は1980年代初め、中国湖南省の山間部で、集落から集落へ手紙を届ける郵便配達員の姿を描いた(だけの)、純朴そのものの映画だが、それは日本人が忘れていた“何か”を思い出させる名作だった(『シネマ5』216頁)。同作中の息子は大人になるまでそんな仕事に従事する留守がちの父親と接する機会がなかったから、今回はじめて同行する父親との最後の2泊3日の郵便配達の旅の中で、いかなる父子の交流と語らいを・・・？

ウゲンが、迎えに来てくれた村の男ミチェン(ウゲン・ノルブ・ヘンドゥップ)や荷物を運ぶ3頭のヤクとともにルナナへ赴任する旅は、山また山の中を1週間以上歩き続けるものだから、『山の郵便配達』の父子よりも過酷。もっとも、それが日常のミチェンは手慣れたもの(足馴れたもの?)だが、都会育ちのウゲンには、毎日続くテントでのゴロ寝体験もはじめてだ。本作のパンフレットには、1945年生まれの教育者、名取弘文氏の「やる気のない青年を教師に育ててくれるのは」と題するコラムがあり、そこには「私は何を隠そうデモシカ教師である」との一文がある。ブータンに“デモシカ教師”という概念があるのかどうかは知らないが、導入部に見るウゲンはまさに“デモシカ教師”。国の命令に従って、また、家族や恋人(?)に見送られて旅立った以上、途中で引き返すわけにはいかないが、村長をはじめとする大勢の村人たちのお迎えの中でウゲンが語った言葉は「申し訳ないですが、僕には無理です」だったからアレレ。そんなことを言われたら、日本でも中国でも「ふざけるな！」と返されるところだが、“国民総幸福の国”のブータンで村長が返した言葉は・・・？

■□■ 黒板なしノートなし。こりゃ『あの子を探して』以上！ ■□■

『あの子を探して (一個都不能少)』(99)、『シネマ5』188頁)は辺鄙な農村にある在校生わずか28名という小学校の1ヶ月だけの代用教員になる13歳の女の子が主人公。同作では、“張藝謀ガール”として抜擢された女優、魏敏芝(ウェイ・ミンジ)の可憐さが際立っていたが、前半のストーリーで面白かったのは、チョークが貴重品だということ。前任者から「教科書の字を黒板に書き写し、生徒たちにそれを書き取らせるように」と指示されたものの、黒板に書くためのチョークは貴重品で、1日1本が使用限度、というエピソードが興味深かった。しかし、ウゲンが赴任した、ルナナにある“山の教室”は建物ガボロボロなら黒板もないから、アレレ。そのうえ、向学心に燃え、目をキラキラ輝かせているペム・ザム(ペム・ザム)たちに書き取らせるためのノート(紙)も貴重品だから、さらにアレレ。また、ウゲンの宿舎(?)の窓は永久紙で貼られただけだし、外に

設置されているトイレを視察すると、そりゃひどいもの！また、電気は通っているものの、ウゲンの命の綱ともいえるスマホは通じないし、ヘッドホンで音楽を聴こうにもしょっちゅう停電になるから充電もままならない。したがって、「こりゃ、俺にはとても無理」、そんなウゲンの発言は人を馬鹿にしたものだったが、人のいい村長はそれを認めてくれたからウゲンは超ラッキーだ。しかし、最初の授業で「将来は先生になりたい」と語った男の子に「君はなぜ先生になりたいの？」と聞くと、彼は、「先生は未来に触れることができるから」と答えていたことを考えると、ウゲンは？

■□■ミュージシャン志望なら“ヤクに捧げる歌”だって！■□■

冒頭に見た、オーストラリアに行ってミュージシャンになることを夢見ている青年、ウゲンは、日本にもいるような今ドキの若者だが、ギターが弾けてちょっとした曲を作ることができるレベルなら、ルナナの人たちが歌っている“ヤクに捧げる歌”だってすぐに歌えるはずだ。ミチェンは首都ティンパーからルナナへの1週間以上のハードな旅を、そんな歌を歌いながら楽しそうにこなしていたが、ウゲンには苦痛そのもの。したがって、峠に宿っているという神様を祝福する気持ちにもなれないし、“ヤクに捧げる歌”を覚えようという気にもなれなかったのは仕方ない。

しかし、ルナナで生活をするについては、ヤクと共存することが大切だと気づいたのは、ルナナではヤクの糞が火力になっていることを知ったため。乾いたヤクの糞がなぜ火力になるのかは分かるような気がするが、そうかといって、毎日これを集めて回るのは大変。しかし、ある日、ウゲンがその作業を行っているとき、美しい歌声で“ヤクに捧げる歌”を歌っている村の娘セデユ（ケルドン・ハモ・グルン）と知り合ったからラッキー（？）。以降、譜面もない中で“ヤクに捧げる歌”を教えてもらうことがウゲンの日課になると、2人の間に心の交流が芽生えることに。ひょっとして、これは赴任地ルナナでの恋物語に？さらに、セデユはウゲンのためにノルブと名付けられた1匹のヤクを届けてくれたから、ウゲンにとってこのヤクは心強い生活上のパートナーになっていくことに。

■□■山の教室での授業は？ルナナでの“ドレミの歌”は？■□■

“山の教室”でのウゲンの最初の日の授業は簡単な自己紹介だけだったが、翌日の算数から始まった授業は生徒たちから大好評だ。そんな状況下、ある生徒の「先生は未来に触れることができるから、将来は先生になることが夢」発言が心のどこかに残っているウゲンは、ルナナ到着早々の「僕には無理です」発言を撤回。これには生徒たちはもちろん、「無理強いをすることはできない」とウゲンの気持ちを尊重してくれた村長も大喜びだ。

村に残って教師を続けるについて、ウゲンが希望したのは、黒板を準備してもらうことだが、村人たちの手作りの黒板が備わると授業は更に本格的に。食料などの村人からの支援も万全だ。逆に、生徒たちが使う紙が不足すると、ウゲンは自分の部屋で風よけのために使っていた永久紙を供出してくれたから、生徒たちは大感激。英語の授業だって、教科書などなくともウゲンが流暢な英語で物語を聞かせてあげればオーケーだし、ティンパー

からギターが届くと、授業の合間にはギターを使っただけの合唱が広がっていった。

ジュリー・アンドリュースと7人の子供たちが歌っていた『サウンド・オブ・ミュージック』(65年)における“ドレミの歌”の学習風景は、美しいアルプスの山々が最高にマッチしていたが、標高4800mのルナナだって、高さはもちろん、風景の美しさでも負けてはいない。本作中盤ではすっかりルナナの村民と“山の教室”に溶け込んだウゲンのギター伴奏で聴く、ルナナ村での“ドレミの歌”をしっかりと楽しみたい。

■□■ “冬が来る前に” ウゲンは帰国？それとも、残留？ ■□■

私の学生時代(1967年～1991年)はフォークソングの全盛時代だったが、70年代、80年代、90年代も「イルカ」、「さだまさし」等々のシンガーソングライターの活躍でフォークの人気は続いた。そんな時代状況下、1977年に「紙ふうせん」が歌った『冬が来る前に』も大ヒットした。これは「冬が来る前に もう一度あの人とめぐり逢いたい」という女心を歌った切ない名曲だが、5月8日にオンライン試写で観たモンゴル映画の『大地と白い雲(白云之下)』(19年)に登場していた厳しい冬の天気と同じように、ルナナでは冬が来ればすべての生活が閉ざされるから、ウゲンがティンパーに戻るのには、冬が来る前でなければならぬのは当然。それを伝えるためにウゲンの宿舎にやってきた村長は、「出発は明後日だ」と告げたが、山の教室に馴染み、セデュとの淡い恋心も生まれているウゲンはどうするの？ここで「俺はルナナに残る」と宣言し、セデュと結婚し、子供を儲けてルナナで一生を過ごすのも1つの選択肢だが・・・。

事前にパンフレットを読んでいればその後の展開が読めたはずだが、事前情報が全くない中での鑑賞はそれが全く見えてこない。帰る準備の完了、生徒たちとの別れ、そしてセデュとの別れを終え、今はいよいよすべての村人たちの見送りの中、ミチエンたちと一緒に旅立ちだが、さあウゲンはどうするの？それをここで書いてしまえばおしまいだから、それはあなた自身の目でしっかりと！

ちなみに、ルナナの人口は56人だが、ウゲンが夢見ているオーストラリアで首都シドニーに次ぐ第2の都市メルボルンの人口は、約500万人。しかし、ウゲンが弾くギターの音色はルナナでもメルボルンでも同じはずだが、そのギターから出てくる音楽に込められた心はメルボルンとルナナでどう違っているの？“優柔不断”と言ってしまえばそれきりだが、ウゲンはまだまだ若い。本作ラストのシークエンスをしっかりと鑑賞しながら、ウゲンの前途に拍手を送りたい。

2021(令和3)年7月1日記